書評

伊藤聡著

『中世天照大神信仰の研究』

（法蔵館・二〇一一年）

原　克昭

中世神道をめぐる研究史に新たな展望と新境地をきりひらく伊藤聡氏による待望の大著『中世天照大神信仰の研究』が刊行された。ここに「書評」を寄せるにあたって、同門後輩として公私にわたり学恩に浴している稿者では、いささか親しすぎる憾みもあるかもしれないが、斯学の劃期を顕彰する企図もふくみつつ筆を執らせていただくことにする。

一

まずは、本著の特色と梗概を見据えておく。著者は、「中世神道の日本宗教史上における意義は何か」を追究すべく、持ち前の抜群な学問的記憶力と精力的な資料探査の成果を惜しみなく発揮しつつ、「中世天照大神信仰」を焦点化し言説と動態の諸相を考究する。つとに「中世宗教観の転換迫る／衝撃力強い研究成果」（末木文美士『中外日報』五月二十六日号書評）、「学問的信念と粘りに貫かれる／新しい時代の基本文献」（松本郁代『週刊読書人』五月六日号書評）との評価を得ているとおり、著者の研究を「中世神道説の核心に迫る、劃期的大著」（法蔵館による帯紹介文）と位置づけることについて異存はないだろう。

では、本著の劃期性は何処にみいだされるであろうか。先行研究との最大の相違点を考えたとき、それは研究の指向性と方法論にあるといえよう。これまで先達による「中世神道」と銘打つ研究書は少なからず刊行されてきた。ただし、その大半は前代の神道研究環境もあずかって、「仏教史」に拮抗しうる「神道史」の構築が時代的かつ学問的な至上命題として屹立していた。いまや古典的名著というべき先行研究――たとえば大山公淳『神仏交渉史』、久保田収『中世神道の研究』、西田長男『日本神道史の研究』しかり。そのため、おおむね通史的で内部完結的な「神道史」の叙述に主眼が置かれ、ふかく中世神道の思想的内実にまで肉薄されることはきわめて稀であった。場合によっては、発達史観に傾倒するあまり、神仏習合化した中世神道に不当な評価が与えられた場面も少なくない（もちろん、いまや「資料学」とも称される調査環境が整いつつある現況とは異なる資料的制約性の問題も考慮しておく必要がある）。

しかるに、既成の「神道史」の解体・再構築が提唱され、中世神道に対する再評価の気運が高まるなか、本著はたんなる「神道史」の紹述をめざすわけではなく、あくまで「思想研究」

を指向する。主題にこだわり、中世神道にまつわる言説の形成過程とそれをとりまく動態を、博捜した資料考証に基づいて追究してゆく。つまり、従前の中世神道研究の羈絆をくぐりぬけ、研究の指向性と方法論を大きく〝更新〟させた点に、本著の劃期性を認めることができる。そのような特色は、五部構成二十一章の全六六〇頁超におよぶ「目次」を披くとき、より明瞭となる（各節題は省略）。

緒言（一、研究史／二、本書の意図と構成）
第一部　天照大神と大日如来の習合――中世における神祇と密教
第一章　天照大神・大日如来同体説の形成／第二章　大日本国説――密教化された神国思想／第三章　第六天魔王譚の成立――国土創成神話の中世的変奏／第四章　第六天魔王譚と荒神信仰／付論　鎌倉期両部神道書における梵天王説
第二部　変容する天照大神――同体説の諸相
第一章　天照大神・十一面観音同体説の形成／第二章　二間観音と天照大神――天皇の念持仏との習合／第三章　天照大神・空海同体説――東密三宝院流の秘説形成／第四章　外宮高倉山浄土考――伊勢神宮における弘法大師信仰／付論　称名寺の中世神道聖教――特に伊勢神宮に関する伝書について
第三部　天照大神信仰の秘説展開――神道灌頂の形成
第一章　中世密教における神道相承――仮構される系譜／第二章　伊勢灌頂の世界――変容する神観念／第三章　田夫愛染法――神道化する密教秘説
第四部　天照大神信仰と中世文芸――中世神道と和歌注釈との出会い
第一章　梵漢和語同一観の成立基盤／第二章　伊勢二字をめぐって――古今注・伊勢注と密教説・神道説の交渉／第三章「ちはやぶる」をめぐって――歌語の神秘化／第四章　或る呪歌の変遷――和歌陀羅尼と中世神道
第五部　天照大神信仰と僧徒――その言説形成を担った人々
第一章　文治二年東大寺衆徒伊勢参宮と尊勝院主弁暁／第二章　重源と宝珠／第三章　無住と中世神道説――『沙石集』巻一第一話「太神宮御事」をめぐって／第四章　伊勢神宮における西大寺流の動向――特に円明寺覚乗を中心として
総結／あとがき／索引

天照大神をめぐる言説の生成論（第一・二部）から展開の諸相論（第三部）、そして同時代の諸文芸との影響論（第四部）、さらに言説形成を担った僧徒たちの動態論（第五部）におよぶ。著者による数多の研究成果のうち、とくに天照大神にまつわる珠玉の諸論文を集成した「思想研究」の精華である。かりに関心のある領域から読み進めたとしても、適宜「注」に示される

とおり各論が相互補完的に連動するような趣向をとっている（ただし、「注」の参照表記には【　】の有無など若干の不統一と混乱もみられるが、とくに支障はない）。

また、本著がけっして発揚的研究（アド・バルーン）を企図したものでないことは、劈頭の「研究史」を繙くだけでも一目瞭然である。むしろ、先行研究に対する謙虚な理解と客観的叙述で綴られた「研究史」は、斯学における恰好の手引きとなる。本著を研究の指向性と方法論の〝更新〟と意義づけた所以でもある。そのうえで、「中世神道を、古代の遺制と見なすか、近世の先駆と見るか」という従来の視座に対して、自身の研究スタンスを「〈中世〉神道として、その独自な意義を積極的に認めようとするもの」（一五頁）と明示する。恣意的な言い換えが許されるならば、資料の紙面から読みとれる「ありのまま」なる「中世神道思想」を探究することで「思想史」認識を逆照射した試みともいえよう。中世は、古代から近世そして近現代に至る通過地点、ましてや等閑視（スキップ）されかねない時代などではない。本著は、〈中世〉という時代層のなかで〈中世〉神道に対峙し、徹底した資料考証に立脚して「日本宗教史上における意義」を捕捉しようとする指向で貫徹された研究である点を、まずは特筆しておきたい。

二

ひきつづき、諸論の位相を見届けてゆく。各論の問題の所在と今後の課題については、著者自身が「緒言」「総結」で整理しているので、ここでは逐一の内容紹介や細部の議論は省略にしたがい、本著の醍醐味ともいうべき論点と論証の意義を摘記しておきたいと思う。

第一部・第二部は、天照大神をめぐる諸尊・祖師との「同体説」および連環する「大日本国説」「第六天魔王譚」を考究した研究であり、すでに頻繁に引用・参照されてきた、いわば〝人気論文〟たちである。仏教の諸尊とは異なり、儀軌の存在しない神々は習合することで多彩な意匠を纏い多様に変貌を遂げてきた。では、なぜ習合が要請されたのか、そこに論理性はあるのか、なぜ諸説が併存しうるのか。近代合理主義的な視点では透視しかねる中世的アナロジー（想起・喚起・連想）の思考回路を、博捜した資料群と緻密な解読によって解明している。かつて稿者は、中世神道説を再評価する上で、アナロジー的発想と実証学の際どいあわいに思想的磁場を見据え、その非合理性に潜む「中世の論理」の発見・理解が最大の難題だと述べたことがある（『日本思想史ハンドブック』「中世神話の世界」）。本著では、「同体説」「大日本国説」「第六天魔王譚」の解読を通して、徹底した資料主義と実態論への帰着を梃子に難題を克服してみせる。諸説のモチーフの変奏をたどりおこしつつ、神仏の緊張関係のなかに自国意識の変容、粟散辺土観・神国思想の盛衰など思想史的意義をみいだす。また、「大日同体説」における「成尊」、「空海同体説」における「三宝院流・西大寺流」

の介在のごとく、言説の生成基盤を実態的に究明するには、諸流派の人脈に通暁していなければ成しえない。「一種の観法」と捉えた僧徒の参宮説は第五部の動態論とも呼応しあう。

かたや、資料批判に対する炯眼もするどい。飜刻本文の誤読はもとより、ときには写本の誤写すら見逃さない。たとえば、典拠『大智度論』の「葦紐（ヴィシュヌ）」を意識的に読み換えた『大和葛城宝山記』の「事（葦）網」＝「葦牙」という中世神話的アナロジーの文脈を考察するかたわら、飜刻諸本の誤記訂正にも言及する（一七一頁）。一見、瑣末な指摘のようにみえるかもしれないが、これはひとたび中世神道説本来の意図を斟酌せぬまま近世に書写され近代に飜刻・校訂された本文の無理解ぶりを露呈させ、ふたたび中世神道説の生成の場へと遡源させた復元研究にほかならない。たとえ飜刻された資料であっても、可能なかぎり原本調査の労を惜しまない地道な調査研究の為せる技といえようか。近世以降のフィルターは写本の一字一句にさえ伏在している状況を示唆してあまりある。

第三部では、三種類の「神祇灌頂」を通して言説と動態をきりむすぶ現場に肉薄する。各種各処に散在する印信切紙（ときに現在の調査現場では敬遠されがちな）資料群を丹念に蒐集・整理・解析し、「灌頂」という営為が「相承血脈」という「虚構・作為の産物」のもとに成立した経緯を指摘、「虚実のあわい」に中世神道の存在意義をみいだす。この視座は、中世に横溢した一連の偽書・仮託書など秘説形成の問題とも絡みあう。神道の近代化とともに廃絶の途をたどった「神祇灌頂」は、まさにその典型例である。著者も述べるように、もっか資料蒐集段階の過渡にあり、その復元研究には今後を俟つところも大きいが、「神祇灌頂」の実態解明が「神道史」を塗り換える鍵を握っていることはまちがいない。

第四部は、同時代の諸文芸との関連から、中世神道説と歌学・密教説の錯綜する特異な言説空間に分け入った諸論。たびたび著者も言及しているとおり、中世神道へ再評価の気運をもたらしたのは中世文学研究からであった（伊藤正義「中世日本紀の輪郭」ほか）。ここに収める各論は、国文学からの発信を受けた思想史研究者による再発信でもある。主題化された「梵漢和語同一観」は、神話起源の指向からアナロジー的論理をくりひろげつつ諸学・諸宗教に通底する中世特有の言語観である。著者は、前半部で展開した秘説分析を応用させながら、明覚・了尊・慈円あるいは安然の言語観のうちに自国意識の温度差を見定める。この問題は、和歌文学研究でも再注目されつつあり議論の進展が期待される。

第五部は、中世神道説を担った人的環境として僧徒に着眼し実態を考究した諸論で、すべからく神宮・神官を基調とした従来の中世神道研究の視座を一気に転回させる。新資料もふまえながら、「弁暁」「重源」「無住」といった著名な僧徒の隠された行状の解明は、第一部で採りあげられた伊勢参宮説の立体証明としても読める。また、西大寺流に名をつらねる学匠を掘り

起こし系譜の俎上に据えてみせる手法は、まさに著者ならではの本領発揮の趣である。そして、「神道と仏教を対立的関係でのみ解釈しようとする」従来の見方に対して、「このような解釈自体近世・近代的バイアスの所産である」と看破した上で「ひとつの有機的運動」（六四三頁）として捉え返す。この視座は中世神道のみならず、ひろく「神道史」を縦断する警鐘であり展望として受けとめるべき提言であろう（個人的には稿者が初出論文で接して以来、景仰している見解のひとつでもある）。

掉尾に「総結」として各論の課題が簡便に整理される。ここに提示された課題は、著者自身の課題であると同時に、隣接諸分野をふくむ斯学の課題として共有できる。たとえば、第五部第三章に収められた論文は、国文学による従前の『沙石集』巻頭話の読みを書き換えたのみならず、その射程は無住をとりまく宗教圏へと仕向けられている。この議論の延長は、さらに現在進行中の無住遠忌論集においてさっそく展開させるとの由である。

如上、章立てされた各論文は、いずれも「はじめに」として問題の所在を明示し、厖大な資料の提示と丹念な実証を通して見解を導く手法で一貫している。また、関連論文の提示や初出稿の補正など「注」に示された情報量もきわめて豊富である。もっとも、序論「はじめに」で提起された先鋭的な問題意識、精緻で重厚な考証に貫かれた本論に比して、結論「おわりに」における筆致の淡泊さに若干の物足りなさを感じるかもしれない。全体的な論述構成の統一を図った経緯もあろうが、それは著者の執拗なまでに資料に依拠して論証過程に力点を置いた研究姿勢の表徴にほかならない。むしろ、著者は安易な結論を導きだすことには、ストイックなほど慎重を期す。そのような著者の研究姿勢は、初出稿からの加筆状況にも如実に表れている。たとえば、『神祇講式』をめぐる「貞慶真撰説」と「三宝忌避」に関する批判と補正（一四〇頁）、真福寺本『高庫蔵等秘抄』における識語の判断訂正（三二〇頁）ほか論証にかかわる部分には、もれなく初出稿以降の議論をふまえた加筆修正が施されている。さらには、「二神約諾神話」をめぐる最新の論争経緯（二一九頁）、「二間観音供」に関する新出の歴史学・仏教学研究への目配り（二四二～四三頁）など、周縁の学界動向にも機敏に反応し議論を増幅させている。著者みずから、たえず研究を進化（深化）させて〝更新〟しつづけてゆく真摯な学問姿勢には、ひとえに敬服するばかりである。

三

共同研究による資料調査の現場での一齣――「このような印信類は、伊藤さんにお任せしよう」などといった場面に立ち会った経験が少なからずある。もちろん著者の学問に対する信頼度の現れであろうが、その一方で依然として一部の特殊領域化されている印象を払拭しきれなかった。しかし、本著を手にしたとき、そのような懸念は解消された。むしろ、本著は他分

野・他領域からの議論・批判を待ち望んでいる「披かれた大著」だからである。最後に、蛇足ながら本著の持つ披かれた可能性にふれておきたいと思う。

先に本著の劃期性について、研究の指向性と方法論を〝更新〟させた点にあると紹介したが、その射程は既存の学問研究ジャンルの域をゆうに越境してゆく。本著は、もはや既成の「中世文学」を解体せんとする趨勢にある国文学、かたや新たな「中世史」像を開拓せんとする歴史学、これら隣接諸領域からの議論・批判に応えうる「思想史学」からのテーゼでもあろう。かりに他領域から寄せられるであろう疑義や批判を想定したとき――たとえば、成立年代や著者すら確定されない資料をいかに扱いうるか（資料性の問題）、時代区分に対する認識が甘くないか（歴史認識の問題）、あるいは中世神道に「教理／教説／教義」の意識はあるか（教学的な問題）、「中世」を特化しすぎていないか（思想史的な問題）などなど。ただし、これらは本著にかぎらず中世神道研究に内在する課題である。たしかに、「神道」に関する術語ひとつとってみても、本著中には「仏教系神道」「密教系神道」「両部神道系」などの叙述が散見される。それぞれ定義の曖昧さを指摘することはたやすい。しかし、中世神道研究の現状にとって、それはさしたる問題とはいえない。いまは個々のテキストを丹念に読み解き、内部徴証から「中世神道」像を形成する段階にようやく差しかかったところだからである。さもなくば、あらかじめ見取図を描いた上でそこに諸書や人物を点綴してゆく、つまりまずは定義ありきの研究では、かつての「神道史」構築の試みと同じ陥穽に嵌ってしまうにちがいない。その意味でも、本著で展開された諸論がいずれ定説化するとともに、その貫徹した資料主義の研究姿勢とその方法論もまた規範となるべきところであろう。

さて、本著は、あくまで忠実に「中世天照大神信仰」にこだわった形でまとめられているが、ここに収録されなかった論文も数知れず、著者の視野は「中世」という枠組みに収まりきるものではない。近世思想史の文脈で論じられてきた「胎内十月図」をめぐる諸問題について、すでに著者はその萌芽を中世にみいだし御流神道との関連性に着目している。さらには「真言立川流」の問題と関わって、平安期から近世におよぶ壮大な議論を予感させる。中世神道をとりまく言説解析から「日本における神の言説」の特質を「日本という〈場〉に絶対的に規定されている」点にみいだした著者は、「中世もまた近世・近代の〈神道〉と同じ問題を共有している」（三八七頁）と指摘する。中世神道説から発現した課題を基盤に、古代ないし近世～近現代との断続性を問う提言は、新たな「神道史」の予兆としても聞こえる。ちなみに、稿者自身も学師より、我々の使命は「縦の「思想史」研究と横の「思想」研究の経緯を織り成すことだ」（土田健次郎著『道学の形成』「後記」）との薫陶を受け、不肖にも肝に銘じていることである。いちはやく中世神道の横軸となる「思想研究」を織り成した著者だからこそ、冀わくは縦

軸となるべき「神道史」の再構築を期待してやまないのは、おそらく稿者だけではないだろう。

学会誌にとって、ひいては著者にとっては「書評」ともつかぬ贅言に終始してしまったが、斯学にとって、著者の曰く「鬱蒼たる言葉の森」に挑むための新たな方位磁針を獲得したいま、「中世神道」研究は何処に向かうべきか、同門後学のひとりとして遙けき思いをめぐらせつつ綴らせていただいた。

（早稲田大学非常勤講師）

辻本雅史著

『思想と教育のメディア史——近世日本の知の伝達』

（ぺりかん社・二〇一一年）

宇野田　尚哉

一

ここで取り上げるのは、辻本雅史『思想と教育のメディア史——近世日本の知の伝達』である。この書の著者が、研究書としては『近世教育思想史の研究——日本における「公教育」思想の源流』（思文閣出版、一九九〇年）の、一般書としては『「学び」の復権——模倣と習熟』（角川書店、一九九九年）・『教育を「江戸」から考える——学び・身体・メディア』（日本放送出版協会、二〇〇九年）の著者として、すでに評価の定まった日本思想史・日本教育史研究者であることは、周知の通りであるだろう。本書は、その著者が一九八九年から二〇一〇年にかけて発表した研究論文を集成した論文集である。まずは本書の構成を紹介しておこう。

Ⅰ　貝原益軒の思想——教育・メディア・身体

第1章　近世における「気」の思想史・覚書——貝原益軒